

山口・史跡萩城跡しせきはぎじょう（外堀）

- 1 所在地 山口県萩市大字南片河町・堀内
- 2 調査期間 一 二〇〇六年（平18）六月～十二月、二二〇六年六月～一〇月
- 3 発掘機関 一 萩市建設部文化財保護課
二（財）山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 一 西川雄大、二 井川隆司・竹内 靖
- 5 遺跡の種類 城郭跡・城下町跡
- 6 遺跡の年代 近世



（萩）

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
調査地は、毛利氏の居城である萩城の、三の丸（堀内）と城下町を分ける外堀の東岸に位置する。外堀は一七世紀前半の築城当初、二〇間（約四〇m）の堀幅があり、軍事的な境界とし

て機能していたが、後に一四間（約二八m）に狭まり、一八世紀の中頃には八間（約一六m）となった。その範囲には町屋が形成され、都市的機能を充実させた居住空間へと変化を遂げた。

外堀東岸では、街路整備事業に伴う発掘調査と並行して、一九九六年から国史跡萩城跡保存修理事業に伴う発掘調査を実施している。二〇〇六年度は、堀内と城下町を繋ぐ、いわゆる「大手三つの門」のうち、「中の総門」周辺南北二カ所と、「北の総門」周辺南北二カ所の計四カ所で調査を実施した。なお、調査の一部は、（財）山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターに委託して実施した。

木簡は、いずれも「中の総門」周辺の調査において出土した。内訳は、市調査区で検出した木製品溜まり五二から二点、県調査区で検出した石垣一〇以西木器包含層から二点で、計四点を数える。

木製品溜まり五二は、八間堀石垣構築直前の廃棄物堆積である。暗灰色シルトの堆積土からは、木簡とともに、方形・円形の把手付蓋、下駄、竹箒、漆器椀、柄杓、「天下」の刻印をもつ棹秤用の分銅などが出土した。共伴する陶磁器は一七世紀初頭から中頃の時期を示す。

石垣一〇以西木器包含層は、八間堀の石垣基底部に堆積した黒灰色粘質土である。木製品溜まり五二と同様、八間堀石垣構築直前の廃棄物堆積である。木簡の他に、下駄・刷毛柄・黒漆塗りの柄鏡箱などの木製品が出土している。

8 木簡の釈文・内容

一 市調査区

- (1) ・^{〔葉カ〕}千五百〇仕入吹田や
丸や八郎左衛門様 喜右衛門



(163)×39×5 019

- (2) ・「十一月廿九日市右衛門」



104×22×2 011

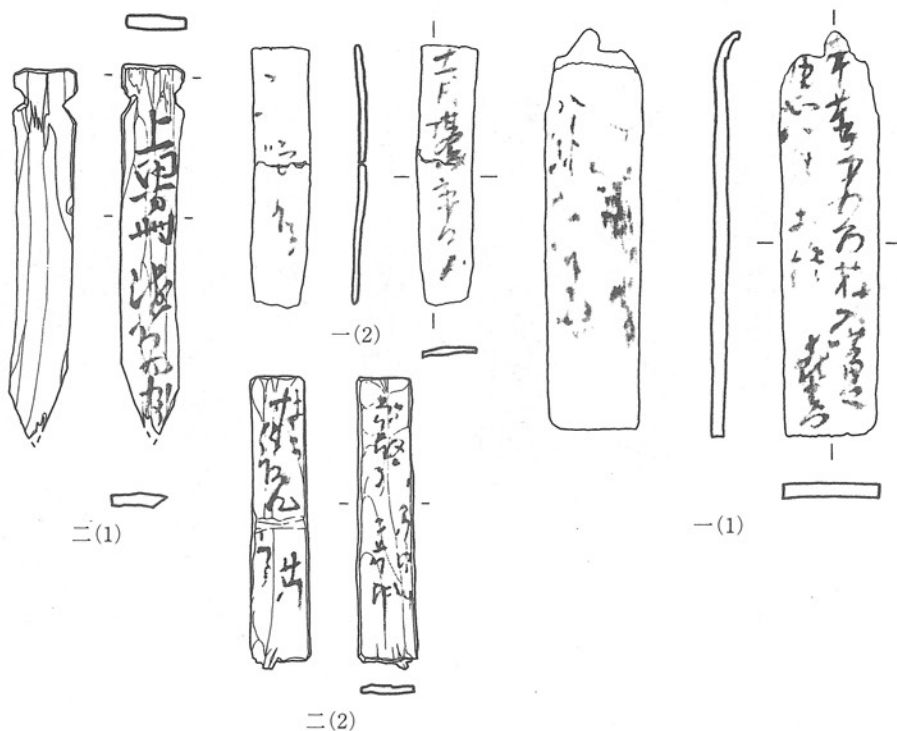
(1)の上端部は表面側に折損。左右両辺と下端は丁寧に削って整形。裏面は表面と同様、二行にわたる墨書が認められるが、判読不能。物品購入を示す木簡であり、先述した共伴遺物からみて、木製品溜まり五二は商家に関連した一括廃棄遺物の可能性がある。周辺の調査では、「井筒屋」の木簡が出土しており（本誌第二八号）、その他「松坂屋」や「伏見屋」の存在も想定されている。

(2)は下端部がややすぼまる短冊型。上下両端には切断痕、左右両辺には削り痕が残る。

二 県調査区

- (1) 「上田万村儀右衛門」

(145)×25×6 033



(2) ・「畔頭作左衛門□」



11.3×22×(3) 019

(1)は上端部寄りの左右に切り込みを入れる。表面下端部は剣頭状に削る。裏面はほぼ全面が剝離しており、墨痕は確認できない。上田万村については、『防長風土注進案』に「村役人は目代兼帯の小都合庄屋一人と給畔頭五人」という記載が見られる。

(2)は短冊型。表裏両面とも中央付近に横方向の圧痕が残る。下端は切断痕の右端に破面が残る。上端と左右両辺は丁寧に削る。裏面にも墨書が認められるが、判読不能。「畔頭」は幕領における組頭に相当。庄屋の相談役となり、管轄内の年貢の収納・検見・戸籍その他の用務にあたった。

なお、木簡の釈読にあたっては、奈良文化財研究所の浅野啓介・馬場基・山本崇・吉川聡・渡辺晃宏の各氏、京都府立大学大学院の水谷友紀氏、山口県文書館の吉積久年氏、萩博物館の樋口尚樹氏のご教示を得た。

9 関係文献

山口県萩市建設部文化財保護課『史跡萩城跡（外堀）』（萩市埋蔵文化財調査報告一、二〇〇七年）

（西川雄大）

